そ の 108

一、座光寺他の浅井 杖突峠を経て高遠に

蒸気機関車に乗って た。上田で下車し、 当時まだ珍しかった を経由して和田に着 温田・丸子・武石等 字旅行隊百余名は、 儿日午前七時五分、 (野停車場を出発し **野尋常師範学校修** 明治二五年七月二 入った。(ここから はいよいよ下伊那に て飯島に投宿した。 は、原文に沿って詳 る。高遠から坂下を ・宮田・赤穂と過ぎ 経て伊奈部・西春近 策後、同地泊。 **本格的な伊那路であ** 翌八月二日、一行 八月一日からは、 高遠城址を散

え、下諏訪の春宮・ き、そこに泊まった。 宿を発った一行は、 秋宮に詣でて後、上 れながら和田峠を越 諏訪泊。 翌朝五時に 二日目は、雨に濡 述する) を過ぎ、座光寺の弓 矢沢より左に折れ 校の熊谷謹一校長が 目指した。途中に同 て、座光寺小学校を 大島・山吹・市田 敷」と呼ばれる村長

続いて、「義光屋

で、如来寺(伊那の

迎えてくれたこ

け、わざわざ我々を

今村村長の周旋

見た。 で一見すべしと勧め 鏡を秘蔵しているの 熊谷氏が親鸞聖人の 迎えに来て、当地の たので、立ち寄って の今村善吾氏宅を訪 の後裔とされる旧家 えられ、今村氏はそ 光が生まれた家と伝 ねた。ここは本多義 である。庭には、義 そ一尺二~三寸で、 る臼を見た。高さ凡 善光寺)の什宝であ

で高岡の森に着いた。 古墳の様子や墳上の それから氏の案内 安置したという善光 像を持ち帰った際に 光が難波から彼の尊

浅井洌の飯田下伊那紀行

明治二五年の修学旅行記より②

くには古墳が多いこ とも知らされた。 れた話を聞いた。近 玉や土器等が発掘さ けようとした際、曲 近頃蚕種貯蔵所を設 高岡神社を見学し、 れていた。 き出て、井桁から溢 清冽な水が沸々と湧 休止し、昼食をとっ た。一行はその庭で た。庭上の泉からは 寺如来腰掛石があっ

貞 うに、一寸八分の仏 や大きいように感じ 体を安置するにはや きいようだった。思 学校に赴き、茶菓の 径はややそれより大 待してもらえたの 饗応を受けた。この ように我等一行を歓 そこから座光寺小 野村銀 員生徒 校外数 下、職 丁の所

男 ある。ここにそのこ とを記して深謝した 十郎収入役のお陰で は、今村村長と熊谷 仪長、 それと 今村嘉 かれて た。 招 えてい に出迎

という通報を受け の上郷小学校から、 息していって欲しい 当校は沿道なので休 同校から十余丁先 と、氷水でもてなし せてもらった。 雲彩寺の古墳から出 校舎の二階に上がる てくれた。そこで、 学校職員の部奈・一 式の二氏が座光寺小 に古鈴・金環等も見 これより先、飯田 り、一緒に飯田高等 宮下氏の迎えもあ 伍を組んで行軍する 小学校に向かった。 数を増し、まるで垣 きっとこの地は、隊 街に入ると益々その 根のようであった。 いた。飯田町手前で 沿道の観衆は、市



で我々が珍しいのだ 兵隊等が通らな いの 心から感謝したい。 当時の今村善吾村長 『信濃諸士肖像録初編』より

学校の教員も数里のったばかりか、各小 員有志もこれに加わ を受けた。郡役所職 既に用意されてい ・諸氏が集まって歓隣諸校の校長・訓導 迎してくれた。 道もいとわず駆けつ と、同校職員及び近 と思われた。 飯田学校に 席も 着く く、温かい下伊那人 を中心に、至る所で 長野師範の旅行隊 は歓待された。優し を述べて次回に譲り の心根であろうか。 歓迎されたようだ たい。以上の通り、 が、とりわけ本郡で は、県内各地の学校 最後に多少の所感 の底川の水 涼し諸人の深き心 立ちよりて結ぶも